

学位論文審査結果の要旨
（論文博士用）

氏 名		沖田 佑梨子	
学位論文 目 録	膝屈曲30度から0度の準静的膝伸展時における膝蓋下脂肪体の形状変化と動態		
主 査	職・氏名 小野 武也	副 査	職・氏名 原田 浩幸
副 査	職・氏名 飯田 忠行	副 査	職・氏名 金井 秀作
審査結果の要旨（1000字以内）			
<p>近年、膝関節前方に位置する膝蓋下脂肪体に注目が集まっている。膝蓋下脂肪体は、膝屈伸に伴い形状が変化することや、炎症により線維化することが報告されている。しかし、横径計測や超音波での二次元的評価によって形状変化を計測した研究が多く、膝蓋下脂肪体の全体像を把握するための検討は、十分とはいえなかった。本論文は、膝屈曲30度と0度におけるMRI画像から膝蓋下脂肪体の三次元モデルにより形状変化を調査した初めての研究である。</p> <p>第1章は緒言である。第2章は膝蓋下脂肪体に関連する文献レビューを行った。その結果、膝蓋下脂肪体の形状変化に着目した研究では、二次元的な評価に留まっていることを示した。そこで第3章では、膝蓋下脂肪体の形状変化を3次元的に複数肢位で調査する必要性を述べた。第4章では正常と思われる若年健常者における膝蓋下脂肪体の形状変化を調査した。その結果、膝屈曲30度と0度位の2肢位間において後外側上方から前下方に移動したことを三次元的に初めて明らかにした。第5章では炎症を有する変形性膝関節症と若年健常者の膝蓋下脂肪体の形状変化を比較した。その結果、膝屈曲30度と0度位の2肢位間においてどちらも前方偏位するものの、変形性膝関節症は若年健常膝に比べ、有意に膝蓋下脂肪体の前方偏位量が少なかったことを見出した。第6章では変形性膝関節症に対する治療が膝屈曲30度と0度位の2肢位間における膝蓋下脂肪体の形状変化に影響をおよぼすかを調査した。その結果、徒手療法およびストレッチは膝蓋下脂肪体の形状変化を維持、改善させることを初めて示した。第7章は総括である。</p> <p>以上のことから、これまでに明らかにされていなかった膝蓋下脂肪体の形状変化を健常者と変形性膝関節症について初めて明らかにするとともに、両者の形状変化の相違点を見出した。さらに、リハビリテーション分野において徒手的な他動運動が膝蓋下脂肪体の形状変化に影響するという新知見を示した研究である。これらの知見は保健福祉学分野の応用研究に寄与するところが大きいと判断した。よって、本論文は博士（生命システム科学）の学位に値するものと認められる。</p>			